Title	坂本佳代子氏による「児童福祉実践論における行為法の可能性：ゼミ活動での展開」報告(「〈児童〉における総合人間学の試み」第3回研究会)
Author(s)	田澤，薫
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.3, 2014.3：50-51
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4965
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

「〈児童〉における総合人間学の試み」第３回研究会

坂本佳代子氏による「児童福祉実践論における行為法の可能性―ゼミ活動での展開―」報告

2014年２月12日、今年度最後の〈児童〉における「総合人間学」の試み研究会の例会が開催され、本学児童学科の坂本佳代子氏が「児童福祉実践論における行為法の可能性―ゼミ活動での展開―」と題して報告された。報告の概要は以下の通りである。

今年度の「専門演習Ⅰ（児童福祉実践論）」において、試行的に行為法心理劇を取り入れた。児童福祉実践論における行為法は、現場の保育者・教師になる学生にとって、実践現場における動きを体得することをねらいとする。学生たちには、「今ここにいる人たちがともに楽しめるように自分が振る舞う」ことをねらいとすると伝えている。

心理劇については、以下の文献にあるような理解に立っている。

「心理劇（サイコドラマ、Psychodrama）とは、“自発性に基づく演劇的な表現”であり、“行為の技法”である（ロイツ　Leutz, 1989）。心理劇は、1889年にブカレストに生まれたモレノ（Moreno, 1964）によって創始された。モレノは、幼年時代に近所の子どもたちと椅子を高く積み上げ、神と天使の役割を取り合って遊んだ神様ごっこの体験や、青年時代、ウィーン大学の学生の頃、公園で子どもたちとグループを作って即興的なプレイを試みた体験、そして、新聞のニュースを題材にして、即興的に演ずる即興劇場・自発性劇場での治療的な劇の体験などを活かして、心理劇の発想を組み立てている。

また、モレノは、精神医学における言語的方法を用いた、患者の過去の経験を重視して行われる精神分析の「閉じられた」個人療法を越え、言語を含む、患者の‘いま・ここで’の行為を主体とする「開かれた」集団療法を展開し、アメリカに移り住んで、心理劇・ソシオメトリー・集団精神療法の基本構想を創り、展開した。

日本には、1950年代に、松村康平、外林大作、石井哲夫らによって紹介され、臨床・教育・矯正・看護・医療関係・産業などの分野で、独自な日本での心理劇がそれぞれの地域や立場の独自性のもとに各地で発展しており、教育・訓練・評価・治療に、また人間関係・人格の研究に活用され、今日に至っている。」（武藤安子編著『発達臨床―人間関係の領野から―』建帛社）

心理劇は、「いま、ここで」が重視され認識されながら行為するところに特徴がある。

学生には、「心理劇では「いま、ここで」１つの場面が動きだすので、そのときに自分が思った通りに動いてください。どう動かなきゃいけないかという決まったことはありません。そしてあなたがそこで感じたことをできるだけ意識化するようにしてください」と伝えた。そのうえで、「仲間になること」「仲間になったと思えるようにすること」「どの人にもボールがいくようにすること」など各セッションのねらいを明確にし、空気のボールを用いるなどの条件を付ける。心理劇では監督役がおり、常に監督役は教師が担った。１セッションは５分ほどであり、監督が「はい、ストップ」と中断させ、「まず今自分で気付いたこと、感じたことを書いてください」とすぐその場で書かせる。次いでそれを、全員が発表する。

監督である教師は、学生が発表した言葉の中からねらいに合わせてコメントを加えて、この心理劇をどの方向にもっていくことが学びなのか、方向付けをしていく。学生は行為を通して感じたことに敏感で、その言語化は割によくできた。学生の心の中は、大変細やかに葛藤も生かしながら楽しいと感じ、仲間への気遣いもある心の動きが展開している。

心理劇のなかで捉えた感覚はその場だけで完結するのではなく、同じような思いを現場の子ども

たちも感じていると一般化して考える。学生たちには、それが自然にできた。

心理劇においては、いろいろな言葉での気づきがあるが､その中でもポイントになるものを｢技法｣とよび大げさな表現をしながら意識づける。技法は、毎回の心理劇の中で学生たちの気づきを教師が評価するかたちで、より意識化していくようにしている。

セッションは、心理劇をやり、学生が文字で感想や気づきを成立させ、それを言葉でみんなの前で話すことで構成される。教師は、学生一人ひとりの発表内容を細かく記録する姿勢から、どの学生も大切にしていることを示す。この教師の姿勢は、学生の自尊感情を育てると共に、発言内容への責任意識も育てる。その後で、監督・教師から次回につなげての課題を伝える。この一連をテンポよく進めていくことで、「いま、ここで」から出発することがテーゼである心理劇で、「いま」を大事にするとともに、「いま」からこの先、自分はどうするのかという方向に気持ちを持っていくことを大切にする。

監督もしばしば演者になり、同時に演者として得た気づきを語る。このことを通じて、気づきを語る際のモデルを示すことになっている。学びの場での心理劇として、集中力と緊張感を維持し続け、学生の学びが精度を高めていくための工夫を行う必要がある。

発題者：坂本佳代子氏（上段）

今期のゼミでは心理劇は８回実施した。この中で明らかになった課題を、前回から今回への継続性を明確に学生に伝えながら連続させることを重視しながら進めた。学生は次第に集団を意識するようになり、集団の中での自分の位置取りや役割を考えるようになる。

特に対人援助職においてはリーダー役割が鍵になるので、リーダーの機能を「方向性の機能」「内容性の機能」「関係性の機能」と整理し、現場の保育者・教師が一人で場の方向性を示し内容を創って行くなど複数の機能を担う場合と、複数担当で連携を取り合う場合とがあることを体験的に理解できるように練習する。学生たちは、リーダー役割をとる活動を行う中で、子ども（役割）の主張や気づきを取り入れていく方が活動が発展することに気づいていった。

実習の場で「集団の全体に意識を配れない」ことを課題とする学生は多いが、集団を視野の中に入れ意識化することと、リーダーは助け合うものだという理解、また保育者・教師だけで活動を展開させるものではないという認識は、関連しあう要素だろう。

学生は、当初、自分だけがこんなことを思っているのではないかという不安があったようだが、行為法に臨むなかで、同じ状況の下では他の人も同じように感じることと、また反対に、同じ状況下でも多様な気持ちがそこでは動くのだということにも気がついた。その学びから、自己への客観視が生まれている。

児童福祉実践に直結させた行為法心理劇の新たな展開への期待が膨らむ発題だった。

（文責：田澤　薫［たざわ・かおる］聖学院大学人間福祉学部児童学科教授）